

一九世紀フランスと世代の問題

——思想史のための試論——

松本礼二

はじめに

人間の意識や行動を規定する要因として△世代▽帰属が注目され、思想史や社会科学の範疇として△世代▽概念が発見されたのは、同様の意味で△階級▽概念が獲得されたのとほぼ時を同じくしている。オーギュスト・コントが世代交替に進歩の動因を求めた歴史状況はカール・マルクスが階級闘争に歴史発展の鍵を見出したそれに見合っている。ところで、△階級▽概念がそれが見出された時代状況に離れて広く歴史解釈の基本的範疇として展開されたのに対して、△世代▽概念の適用はコントの時代だけには限らないとしても、いくつかの特定の時代状況に緊密に結びついてきたと思われる。カール・マンハイムの形式社会学的な概念規定の試みやオルテガ・イ・ガセットによる文化史的探究の例はあるが、マルクス主義の階級史観のような形で「世代史観」(?)が論議の対象となる余地はない。世代論はつねにある特定の世代の自己主張であった。

世代分化の事実それ自体は階級分化以上に普遍的であり、超歴史的なものであることからすれば、以上の事実は一見奇異に思われるかもしれない。けれども、おそらくある一定の時代にのみ意識されるということこそ社会事象としての△世代▽問題の本質的な属性のひとつなのである。逆にいうならば、ある特定の時代、特定の社会について△世代▽問題が顕在化する条件を明らかにすることは、その時代その社会の特性について何事かを語ることとなる。

本稿は以上のような観点から、まず、△世代▽意識ないし△世代▽問題が顕在化する歴史的條件について若干の一般的考察を行い、次いで、コントの△世代▽概念の背景であり、たしかに△世代▽が強く意識される条件を備えていたと考えられる一九世紀前半のフランスの思想状況について、とくに自由主義とロマン主義という二つの思想運動を素材に△世代▽問題の観点から照明を当ててみたい。

(一) 世代概念の学説史と文献については、'Encyclopedia of Social Sciences' 中の Julian Marias の記述が概要を教えてくれる。

(二) 本稿は筆者が一九世紀フランス思想研究において出あった問題についてのひとつの作業仮説に過ぎない。とくに、世代意識の顕在化の条件を一般的に論じた部分はなおまったくのトルソーにとどまっていることをお断りしておく。

一 △世代▽意識顕在化の歴史的條件

年齢とともにものの考え方や行動のパターンが変化するという事実それ自体はヒトの生物学的次元に由来する普遍的現象である。社会もまた「誕生—成長—老化—死」という人間のライフ・サイクルを前提として成員の交替を円滑に行うところに存続の根拠をもつ。どんなに停滞的、伝統的な社会にもこの意味での世代問題は存在する。寿命に対

して養育期間が異常に長いヒトの比較動物学的特性と、学習による獲得部分が決定的に大きい人間文化の特質とがこの事情を増幅する。

ギリシア悲劇以来われわれに馴染み深い父と子の相克、親子の葛藤という周知のテーマは基本的には生物学的次元に発する世代問題を意識化したものと考えられよう。⁽¹⁾けれどもそれが一般に人間の存在条件に関わる問題として提起される限りは、そこに社会集団としての、世代間の対立を認めることはできない。⁽²⁾一般に伝統社会では一定の年代に一定の思考と行動の定型が対応する構造それ自体は、成員の交替と移動にかかわらず不変だからである。新しい世代の登場がそのような対応関係、思考と行動の定型それ自体を変化させる事態はそこでは生じない。「大人になる」ことはその社会のフル・メンバーとしての一定の行動型への適応を意味する。成長の途上での逸脱、自由、反抗は伝統社会も必ずしもこれを排除しないが、通例年齢に即したさまざまな青年組織が存在してこれを社会的に管理していることは民俗学、文化人類学、歴史学の各分野で報告されている。⁽³⁾このような場合には、 \wedge 世代 \vee generationsの問題は \wedge 年齢集団 \vee age groupsの問題に収斂されているということができよう。

したがって、社会事象として世代の相違が顕在化するには単に人間が年齢に依じて成長するだけでなく、社会もまた時とともに変化するという条件が不可欠である。 \wedge 世代 \vee 問題の顕在化は社会変動なしに起こり得ないのであって、このことは思想史において世代の問題が鋭く意識されたいくつかの時代を試みに想起すればすぐに納得されよう。⁽⁴⁾F・マントレやK・マンハイムが \wedge 世代 \vee 概念の社会(学)的次元を強調する所以である。⁽⁵⁾

しかしながら、あらゆる歴史的画期や社会変動がつねに世代問題を顕在化せしめ、世代論的発想を促すわけではない。たいていの世代論は一九世紀以後のヨーロッパ近代社会、ないしはその影響の下にある社会を素材としており、

それ以前に問題を遡らせる場合にも世代論という観方は歴史家のものであって、対象それ自体に世代意識が認められるわけではない。たとえはイタリア・ルネサンスの思想史に世代の問題を見出すことは十分可能であろうが、ルネサンスの知識人自身に明確な「世代」意識を認めることは困難であろう。ブルックハルトも述べるように、ルネサンスの個の解放はそのまま普遍的な精神と文化形式とへの一体化と不可分であったからである。ルネサンス知識人の意識においては新しい時代の創造と古代崇拜との間にはなんの矛盾もなかった。「学問のある人が居を定めるところ、そこによい故郷がある」というコスモポリタナな精神にとって、世代にしる民族にしる身分にしる、限定された社会集団の特定の時代の経験の関数として自からの営みを意識することほど縁遠い態度はなかった。そこには新しい「世代」epoch, eraの観念はあっても、「世代」の意識は認め難いであろう。

フランス思想史に名高い古代Ⅱ近代論争は新Ⅱ旧の時代意識が論争の中心主題であり、論争の経緯には実質上世代の問題が反映していると思われるが、しかもそこで問われたのは単に古さが権威をもつことの問題性ではなく、古典としての古代に対する近代精神の挑戦なのであった。⁽⁶⁾近代派もまた近代文化と近代精神の普遍的価値への信頼に立っているものであり、特定の時代の個性的な体験に即して発想しているわけではない。

以上の簡単な考察からも、世代問題が顕在化し世代論という発想が可能になるには、社会変動一般では十分でない、いわば社会変動ないし社会進歩が構造化された社会たる近代社会の到来が前提されるということができよう。世代意識の顕在化がブルジョア革命の帰結と密接に関連し、歴史の動因として世代の相克が注目された最初の事例が一九世紀前半のヨーロッパであったのは当然といえよう。

結論をやや先取りする形になるが、この間の事情をいまい少し敷衍しておこう。まず、ブルジョア革命による身分社

会の解体が社会移動 social mobility を著しく高めることは一般に認められる事実である。この場合、事実として一定の社会移動が垂直的にも水平的にもあるというだけでなく、身分的障壁がたてまゑとして崩されていることが重要である。第二に、啓蒙の進歩観を継承した一九世紀のヨーロッパの激しい社会的変動は社会が不斷に進歩し変化するという信念を一層助長した。この二つの条件の下で、個人の社会的上昇のサイクルと生理的成長のサイクルとが合致し、しかも社会全体との関連で上昇の要求により普遍的な意義を付与しえたときはじめて、明確な形でひとつの八世代Vが意識される。それはまた人間の思考や行動を決定する要因として身分や社会的帰属以上に、あるいは少くともそれと並んで世代への帰属が自覚されるときでもある。周知のようにオーギュスト・コントは三〇年を区切りとする世代の交替が進歩の要因を見出したが、それが可能であること自体近代の社会変動を前提している。その意味では世代の交替が社会的意義を生ずることは進歩の要因というよりはその帰結である。

世代問題と世代意識の顕在化がすぐれてブルジョア革命と近代社会の所産であるとしても、なお注意すべきことが二つある。

第一は世代意識の形成はブルジョア革命の帰結に関わるのであって、革命を行った当事者に世代という意識は通例稀薄だという点である。たとえば、フランス革命は本来複合的な革命であり、その指導者は年齢の点でも社会的出自の点でも実は相当に多様である。なによりも人権宣言から最高存在の礼拝に至るまで、革命のヘゲモニーは移動しイデオロギーは変化しても、革命指導者の普遍的理念への信念は変わっていない。ここでもかれらにあるのは新しい時代の創造の意識であり、同世代としての連帯感とは必ずしもいえない。世代の意識は本来、既に起きてしまった社会変動を所与として受けとり、その産物として自己を意識するところに生ずるのであるから、革命の当事者として時代

を動かした人びとにはみられないのが普通である。明治の日本に例をとるならば、旧弊固陋・伝統墨守に文明開化を對置する明六社までの段階では世代の意識はなお自覚的でない。徳富蘇峰が「天保老人」に對する「新日本の青年」に自からのアイデンティティを求めたときはじめてそれは明確になったのである。⁽⁹⁾

第二に、もし本当に、コントが期待したように近代社会において世代の交替がスムーズに行なわれ、それが規則的な進歩を促したとしたら、そのときには世代意識もまた消失し、世代の問題が思想史の主題となることもなかったであろう。世代意識は自からの世代が歴史の基本的な趨勢を担うことを確信しつつ、現実には古い權威によって自分の道が閉ざされていると感ぜられるときもつとも強化されるからである。

(1) 旧約聖書サムエル記におけるサウルとダビデの関係もこの意味での父と子の対立を象徴的なことばで語っているといえよう。

(2) プラトンの対話篇の登場人物の間にはある意味で慎重に年齢差が設定されておりそこに世代の違いを認めることも今日の読者には可能である。だが『國家』冒頭のソクラテスとケパロスとの老年についての対話も示すように、對話者自身においては人間の存在条件一般の問題としてしか年齢は意識されていない。時代はとぶが、ツルゲーネフの『父と子』のバザロフ父子の対立は明瞭に一九世紀中葉のロシアにおける世代の相剋を背景とする点で、それまでの数多の「フロイト」的主題を扱った文学作品から區別される。

(3) たとえばフランスの歴史家 Jean Pierre Gutton の伝えるマンシアン・レジムの 聖堂区に存在した青年組織「garçons de paroisse」は日本のトモにおける若者組に酷似している。Jean Pierre Gutton, *La sociabilité villageoise dans l'ancienne France*, Hachette, 1979, p. 51 et seq. 彼らの青年組織のもつとも重要な役割は共同体の種々の祭儀へのイニシエーションを行うことと婚姻、および性行動を管理することにあつたと考えられる。homo symbolicum の構成する共同体にとってその二点は共同体の安定再生産にとって不可欠な要請だからである。

(4) 一九世紀前半のヨーロッパ大陸諸國、ワイマール期のドイツ、明治二〇年代、あるいは第二次大戦後の日本など、い

ずれも巨大な社会変動を経験したその次の時代である。

(5) François Mentré, *Les générations sociales*. 1920. Karl Mannheim, *The Problem of Generations*, in K. Mannheim, *Essays on the Sociology of Knowledge*, Routledge & Kegan Paul. 1952.

(6) ヤコブ・ブルクハルト・柴田治三郎訳『イタリヤ・ルネサンスの文化』（中央公論社・世界の名著45）一九四一—九八ページ。

(7) 同、一九八ページ。

(8) ポール・アザールはこの論争の結果として古代の歴史、さらに歴史一般への不信が強まったことを指摘している。Paul Hazard, *La crise de la conscience européenne*, Fayard, 1961, pp. 44-7. 一八二〇年代におけるロマン主義論争は古典への盲目的崇拜を論点とした限りで古代⇄近代論争のヴァリエーションとしての意味をもっている。もちろん、理性ではなく情念や感情を掲げた点にロマン派の近代派との決定的相違があるのだが、アザールの指摘に関連して興味深いのは、ロマン主義の昂揚はフランスにおいて歴史への関心をもっともめざましく増大した時代を背景にしていることである。

(9) 明治時代の日本における世代の問題については岡和田常忠氏の短いが興味のある論文「青年論と世代論——明治期におけるその政治的特質」思想、一九六七年四月号に学んでいる。

二 世代問題顕在化の事例

(イ) 立憲王政期のフランス社会と自由主義の新世代

世代問題の顕在化は一九世紀前半のヨーロッパに広く認められる現象であるが、⁽¹⁾革命の祖国フランスにおいてそれはとくに著しく、また独特の様相を帯びている。

一八一四年から一八四八年に至るフランスは政治史的にはいうまでもなく立憲王政期であり、厳格な制限選挙制の枠の中で、フランス革命の掲げた立憲主義の諸原則が曲折を経つつも政治制度に定着していった時期である。その過

程はまた同時に、アンシャン・レジム以来の貴族勢力の社会的影響力が衰え、「中産階級」*la classe moyenne* すなわちブルジョアジーが社会の指導的地位を手中に収める過程でもあった。この権力基盤の移行、支配層の交替が一面において世代の交替と連動しているというのが本稿の視点である。

中産階級出身の歴史家、政治家としてこの時期の思想と政治とを導いた典型的人物であったフランソア・ギゾーの晩年の回想的著作に『三つの世代、一七八九——一八一四——一八四八』⁽²⁾という小著がある。そこでかれは八九年の精神を継承して政治的自由の実現をめざした自からの世代を歴史的に弁護しようとしているのだが、しかも一貫してその基底に流れているトーンは、「私は、われわれが政治的自由の証明であり保障であると考えた制度、体制とともに没落した」⁽³⁾という敗残の念であった。学者としても政治家としても最高の地位を究めたギゾーが、二月革命によって強いられた引退生活の中で無念の思いにとられ、権威主義的な第二帝政の下に眠りこんでいる次の世代に対して焦燥感を拭いきれなかったのはある意味で自然であろう。かれの晩年の感傷は復古王政期に台頭して七月王政を担い、そして第二帝政の下で活躍の舞台を奪われたオルレアン派自由主義者に共通のものである。

しかしながら、当事者の回顧を離れて客観的にみるならば、ギゾーのいう「一八一四年の世代」は必ずしも敗北の世代と規定することはできない。少くともかれが比較した前後の世代、大革命および二月革命の世代と比較するならば、ギゾー自身の方がはるかに長期にわたってフランス社会を導いた指導的人物を多く輩出している。ギゾー、ティエール、ヴィクトル・ド・ブローイ、シャルル・ド・レミュザ、ラマルティース、ヴィクトル・クザン、オーギュスタン・ティエリ、フランソワ・ミニユ、ヴィクトル・ユーゴー、ジュール・ミシュレ……。一九世紀フランスの政治と文化の基礎を築いたこれらの人びとはいずれも一七九〇年代を中心とする前後一〇数年の間に生まれ、一八一

四年前後に成人した世代に属している。⁽⁴⁾一八二〇年から一八五〇年に至る三〇年間にこの世代のもっとも活躍した時期であり、それは一九世紀の「ブルジョアのフランス」の原型が形づくられた時期であった。かれらのうちの何人かは第三共和政の初期にも決定的な役割を果している。

この世代に比べるといわゆる「八九年の世代」は、もしそれを革命史の登場人物とするならば、世代としてまとまった存在というよりは党派と理念によって分裂したいくつかの集団ということになる。これを八九年に二〇歳であった世代と理解するならば、この世代の事業はナポレオンのそれに重なる。そして一人の軍事的天才に率いられた国民的動員の体制の下では、特定の世代の意識が生ずる余地は少い。

似たようなことは文脈を異にして「四八年の人びと」les quarante-huitards についても言うことができる。「感情教育」の中でフローベールが造型してみせたように、「ギゾーを倒せ」の叫びの下に二月のバリケードを築いたパリの青年、学生たちの心底に一種の世代意識が強く働いていたことは事実である。⁽⁵⁾だが、かれらの手で新しい社会、新しい時代が形成されるには、二月革命の成果は余りにも実り少く第二共和政はあまりにも短命であった。六月蜂起が革命に決定的な亀裂を生ぜしめたとき、革命の担い手たちは世代の一体感よりは階級間の敵対を否応なく意識させられるであろう。クー・デタ以後の「四八年の人びと」の複雑な分岐が示すように、二月革命の体験はあるいは痛手としてあるいは感傷として記憶されたとしても、それが新たな世代意識形成の核となったとみることは困難である。この世紀の後半はまさに階級帰属が意識を決定することを当然とした時代であった。

ギゾーのいう「一八一四年の世代」が世代としての一体性とその自覚において著しいとすれば、その理由はこの世代を社会的に形成した歴史条件そのものの独自性に求められよう。K・マンハイムは生理的に同一年代に属すること

(generation location, generation status)と區別して、ある範圍の年齢集團に具体的な同質性を付与する社会的背景や歴史的事件を「世代現実」 generation actuality と稱しているが、⁽⁶⁾ギゾーの世代にとってそれはいかなる性格のものであつたらうか。

ギゾーのいう「一八一四年の世代」、いままじ厳密に定義するならば、ギゾーを最年長としてほぼ一八〇〇年過ぎまで生まれ、主として中産階級の出身者、復古王政期に台頭し七月革命以後本格的に社会の指導的地位についた人びとからなる世代にとつて、その「世代現実」は基本的にはフランス革命以来の社会変動であり、より短期的には復古王政の政治反動であつた。かれらは革命の体験を直接有してはいなかつたが、革命によつて解放された階級の子弟として自からの社会的進出が革命なくしてはありえなかつたことを明確に意識していた。その意味で「八九年の子」という世代意識は「第三身分の子孫」という階級意識と矛盾するどころか、それと不可分のものであつた。⁽⁷⁾

こうした世代意識に一層積極性と攻撃性を付与したもうひとつの事情がある。いうまでもなく、それは革命の社会的成果が転覆しえぬ事実であつたにもかかわらず、王政復古によつてアンシャン・レジム勢力が政治的に復歸したことである。歸国した王党派、貴族勢力はイデオロギーの面で反革命運動を展開するとともに、門地と情実による社会的地位の独占を圖つたから、中産階級出身の青年たちの進出は理念の上でも現実にも大きな障害に出あつた。「八九年の子」というそれ自体は受動的な世代意識が革命の継承という能動的課題を発見しえたのはそうした復古王政の体制的価値との衝突を通じてのことであつた。一八二〇年代の自由主義の昂揚から七月革命に至る政治史の展開はそのことなしには起りえなかつたであらう。⁽⁸⁾

一八一四年の世代に限らないが、中産階級の子弟の社会的上昇の通路として学校体系と教育制度とが果たした役割は

一九世紀のフランスでは重要である。学校教育、とくに公教育の体系は大体において年齢に応じて編成された集団に對して、一定の知見と道徳を系統的に教授する制度であるから、それが一般に世代意識の培養基となりがちなことはどこの国でも同じである。ところで公教育はすぐれてフランス革命の思想であり、これを制度化したのはナポレオンの帝政であった。そして、一八一四年の世代こそはフォンターヌ Fontanes によって整備された中・高等教育の担い手であり、またその最初の受益層であった。

一八〇六年の法律と一八〇八年のデクレによって確立した「ユニヴェルシテ」F Université の教育権独占が教育の自由をめぐる教会勢力との長い抗争の発端となった事実が示すように、フランスの中・高等教育機関は一九世紀を通じて一貫して革命の「世俗主義」laïcité と共和主義的精神の担い手であった。⁽⁹⁾ ギゾーも先に触れた著作の中で、復古王政初期の自由主義理念の供給源が帝政末期の大学と学士院にあったことを証言している。⁽¹⁰⁾ こうした政治性は復古王政期の反動期にはさらに顯著であり、一八二〇年代のソルボンヌは *l'Université* と称されたヴィルマン、クザン、ギゾーの三教授を中心に広く学生、市民を聴衆に集め、自由主義的言論の発火点の觀を呈した。そのためクザンとギゾーの講義は政府によって一時中止させられてさえる。⁽¹¹⁾

一八二〇年のソルボンヌを構成した教授と学生、いいかえればギゾー、クザン、ヴィルマンらとその弟子たちとは政治的に一体であるだけでなく、学問的にも一九世紀の学問の基礎を築いたひとつの世代を構成する。一八〇九年に発足した近代大学制度の成立の事情からして、ギゾーやクザンの世代は「教師なき世代」であり、しかも直ちに教えることを強いられた意味で「教えながら学んだ」世代でもあった。⁽¹²⁾⁽¹³⁾

この時代の青年の自己主張の場として大学とならんで大きな意味をもったのは新聞を中心とするジャーナリズムの

世界である。

ジャーナリズムと論壇は革命の成果たる言論の自由を前提にしてはじめて成り立つものである。もちろん、一八一四年の憲章も認めた新聞の自由は復古王政の政治力学の中で何度か蹂躪されたが、そのこと自体、裏返せばこの時期における新聞の力が無視しえなかったことを示している。

ジャーナリズムは言論の自由の原則だけでできるわけではない。実際にそれが成りたつには言論の送り手と受け手、いいかえれば生産者と消費者とがそれぞれ一定の厚みをもって形成されることが必要である。その点で学校教育を通じて中産階級の子弟が知識人予備軍として確実に供給されることが決定的な転換点となる。もちろん、新聞・雑誌は一八世紀にもあったし、シモン・ニコラ・ランゲ Simon Nicolas Linguet のようなジャーナリストの先駆は革命前にも存在した。だが不特定多数の読者の存在を前提に職業としてジャーナリズムが確立したのはやはり復古王政期を始まりとする。

この事情は書籍についても同様であって、読者層の増大を前提にルソーやヴォルテールの普及版が大量に刊行されたのはこの時代になってからのことである。その点でトゥケ大佐 colonel Touquet のような出版家がこの時期の知的カルチュアの形成に果たした役割は量りしれない。⁽¹⁴⁾

一八一四年の世代はジャーナリズムと出版の世界に生産者をも提供した。先にも触れたようにこの世代は学校教育を終えて社会に出たそのときに王政復古によって就職と上昇の機会を奪われた世代である。⁽¹⁵⁾ そうした知識青年たちがジャーナリズムの世界、とくに反政府的自由主義的なジャーナリズムの世界に身を投じていったのは十分に理由のあることであった。ギゾーが帝政末期に官僚として学者として自己を形成していたのに対して、十年年下のティエール

はジャーナリズムを足場に上昇していった代表的人物である。僚友ミニエ、アルマン・カレルと語らって刊行した『ナショナル紙』*le National* が七月革命に大きな役割を果たしたことは周知のとおりである。

ティエールに代表される意欲的な青年に担われた二〇年代の新聞のなかでもとくに世代集団としての色彩が濃厚であるのが、一八二四年に刊行された、『ル・グローブ』*le Globe* であろう。政治的にはドクトリネール系列の穩健自由主義、文学思潮としてはロマン主義を旗印に出発したこの新聞の寄稿者の傾向はかなり多様であり、その編集方針も次第に変化していった。しかし、少くとも七月革命後サン・シモン派の機関紙に転換するまで、執筆者たちの同世代意識は変わらなかったと思われる。ピエール・ルルーとともに初期の『ル・グローブ』を主幹したデュボア Paul-François Dubois は次のように回想している。⁽¹⁶⁾

「ル・グローブの成功の主要な原因はその編集部の性格そのものにあつた。編集部は若く、過去とのあらゆる関わりから自由であつた。われわれの中に古くからの書き手、名のおつた筆者は一人もいなかった。四方八方から集まり、カルボナリもいればありとあらゆる出自のリベローがいた。意見と精神はさまざまであつたが、われわれはひとつのまったく新しい軍勢を形成していたのである」⁽¹⁷⁾

ここには復古王政期の社会状況の中で新聞ジャーナリズムがマンハイムという「世代単位」の形成に決定的な役割を果たした事情が語られている。

われわれはギゾーのいう「一八一四年の世代」を中心にして立憲王政期の世代問題を検討し、この世代にとって学校教育、とくに大学、そしてジャーナリズムの世界が主要な活躍の場であり、そのことがまたかれらの世代意識の基盤となつたことを指摘した。⁽¹⁸⁾ところで、この世代が政治の直接の場である議会から疎外されていたにはユルトラ勢

力の支配という現実を別にして選挙法による制度的要因があった。財産制限が制約となったこともあるが、青年にとってそれ以上に決定的であったのは年齢制限である。すなわち復古王政期を通じて選挙資格は三〇歳以上、被選挙資格は四〇歳以上のままであった。ということは一八一四年の世代にとって議会政治家として活躍する可能性は初めから失われていたことを意味する。一八三〇年の七月革命直前の選挙においても辛うじて最年長者のギゾーが被選挙資格を得たにとどまる。その意味で一八一四年の世代は一八三〇年に至る間二重に政治から疎外されていたといえる。かれらの主張がまず大学やジャーナリズムという知的な場で表現されざるをえなかったもうひとつの理由はそこにある。

七月革命がそうした制約をとり払ったときかれらの多くが政治家として活躍を開始したのは当然であった。かくして、ルイ・フィリップの「ブルジョア王政」はまた「教授たちの王国」(R・レモン)でもあるのである。

(1) もっとも表面的な事実をあげれば、この時代(「ウィーン体制の時代」)は「青年イタリア党」「学生同盟」「青年ヘル学派」等々、青年の運動、学生の運動の時代であった。

(2) François Guizot, 'Trois générations, 1789—1814—1848' Michel Lévy, 3^e édition. 1863.

(3) Ibid., p. 2.

(4) 左に簡単に生没年を記して置こう。

Victor de Broglie (1785—1870), François Guizot (1787—1874), Alphonse de Lamartine (1790—1869), Victor Cousin (1792—1867), Augustin Thierry (1795—1856), François Mignet (1796—1884), Adolph Thiers (1797—1877), Charles de Rémusat (1797—1875), Jules Michelet (1798—1874), Victor Hugo (1802—1885).

もちろんこの世代の人々が革命の世代や四八年の世代よりそれ自体として偉大だったというわけではない。生理的生命も長いがフランス社会の指導的地位にあった社会的生命も長い政治家、知識人、学者、文学者がこの世代には多く出てお

り、かれらの間に世代としての均質性が高いというに過ぎない。

(5) もちろん『感情教育』は小説であって史料ではないが、作者が創作にあたって綿密に第一次史料を渉猟し、一八四〇年代から二月革命にかけての出来事を的確に描写していることは歴史家の一致した評価である。私見によれば、フレデリックとデローリエという二人の青年（この二人の友情のあり方自体がこの時代の青年の意識をよく伝えている）を主人公に、周辺にさまざまな群像を配したこの小説は一八四〇年代の青年像を造型するとともにかれらの世代意識の頂点に生じた二月革命が逆にこれを拡散せしめる転換点となった事情を鮮やかに伝えている。

(6) K. Mannheim, *op. cit.*, p. 302 et seq. マンハイムはさぶた一つの「世代現実」は政治的、思想的傾向性を異にする複数の世代集団を生み出すとして、後者を「世代単位」generation units と呼んでいる。

(7) Victor de Broglie や Alexis de Tocqueville の存在が示すように、この時代の指導者に家柄を誇る貴族がいなかったわけではもちろんない。しかし、そうした個々の出自とその個人が帰属意識をもつ世代の社会的性格とは別の問題である。

(8) 青年の世代意識が社会進歩を前提にしつつ「父の世代」の権威的抑圧に反撥するとき強化されるという構図は一八三〇年以後、「一八一四年の世代」が権力の座に就いた場合にも基本的には変わらない。ギゾーの世代が今度は打倒の対象になっただけである。

一八三一年にアメリカを訪れたアレクシス・ド・トクヴィルはアメリカの家庭では父権が幼少期の子供にしか及ばないことから「アメリカに青年期はない」と述べている。(Alexis de Tocqueville, *De la démocratie en Amérique, Oeuvres Complètes*, Gallimard, t. 1—(II) p. 200) アメリカ社会は進歩と変動を構造化している点でヨーロッパの比でなく、またかれの訪れたジャクソニアン・デモクラシーのアメリカはたしかに建国の父たちから次の世代への指導者の交替の時期であった。にもかかわらず、まさにジェファアソンの定期的改憲構想に象徴されるように進歩と変化があまりにも公理として受け容れられた社会ではそのことによってかえって世代対立は表面化せず、青年の問題も解消されるであろう。このことを洞察することによって、トクヴィルは祖国フランスの社会変動が不断に世代問題の因となり結果となっている事実を逆に見らかにしているといえよう。

(9) フランス教育史の概説としては Antoine Prost, *Histoire de l'enseignement en France, 1800—1967*, Armand Colin, を参照。プロストもフランスのユニヴァルシテが一貫して「中道左派」的であったとしてくる。ibid., p. 80

(10) F. Guizot, *op. cit.*, pp. 87—90.

(11) 一八二二年にソルボンヌを追われたギゾーの講義が一八二八年に『ヨーロッパ文明史』をもって再開されたときのセシモンはギゾーの開講の辞から引用して述べている。François Guizot, Histoire de la civilisation en Europe, Paris, Didier, 1904. Première leçon. 当時マールサイエの法廷に職を得ていたトクヴィルがその聴衆の中にいたことはよく知られているが、それだけギゾーの講義がパリの知識層の話題を集めた証拠といえることができる。二〇年代の自由主義に果したソルボンヌの役割については Louis Girard, Le libéralisme en France de 1814 - 1848 : Doctrine et mouvement, C. D. U. Première Partie, pp. 197-202.

大学その他の高等教育機関での人気教授の講義が学生のみならず市民一般を広く魅了し、一種の知的流行をつくりだす現象はフランス知識界の独特の伝統であるが、一八二〇年代のソルボンヌはその原型をつくったといえよう。それが反政府的言論の昂揚の場となり、これに対する権力の弾圧が問題を大きくして反乱のきっかけとなる事態も、一八四〇年代の後半にコレージュ・ド・フランスにおけるミシュレの講義を舞台に繰りかえされている。

(12) ギゾーをソルボンヌの歴史学教授に推薦したロワイエ・コラール Royer-Collard は、哲学と違って歴史には研究蓄積がないと述べるギゾーに対して「それならば教えるがら学んばよい」と答えたという。Louis Girard, op. cit., p. 177. 文脈をやや異にするが、ミシュレも教育者としての経験がかれの歴史研究それ自体を規定していることを述べている。「もし歴史家としての私が、著名な先駆者たちのかたわらに並ばせてもらえるような特別な功績を持っているとしたら、それは教えたことのお陰となるだろう。教えることは私にとって友情であった。ああいった偉大な歴史家たちは輝やかしい才気と正しい判断力を持ち、そして深みがあった。しかし私はそれ以上に愛したのであった。」Jules Michelet, Préface au Peuple, 大野一道訳『民衆』序文、エドガール・キネ氏へ、二七ページ。

ミシュレ特有の感情のこもった表現であるが、ここには先人の直接の導きなしにアカデミックな学問の礎を築いた精神がいきいきと描かれている。

「教師なき世代」という点は、思想的にいえば、かれらが革命のために一八世紀の思想と学問から切り離された地点から歩き始めねばならなかったという事情に関わる。この場合 missing link をあえてたずねれば、それは帝政期の学士院に集まった Destutt de Tracy, Maine de Biran らのいわゆる「イデオログ」に求められるであろう。しかしながら、ロワイエ・コラールやクザンのいわゆる折衷哲学がコンディヤック以来の感覚論を当面の敵としていたことから知られるように、医学や自然科学と違って哲学と歴史学の分野ではイデオログに一八世紀思想と一九世紀の学問との媒介役を見ることは困難である。

- (13) ここでは大学についてだけ述べたが、革命後のフランスに新しいエリートを供給したという点では *École normale, École polytechnique* などのいわゆる *grandes écoles* がより大きな意味をもったことは知られているとおりである。教師と軍人、高級官僚の供給源としてこれらの学校の役割は大きく、またポリテクニシアンがサン・シモン主義の担い手となった事実もあるが、そこでの講義自体が広く社会の注目を集め、教授たちが知的指導者となるという事態はこの時期の *grandes écoles* にはまだみられない。
- (14) 一七八九年にルソーやヴォルテールを読んでいたのは貴族や一部の知的エリートだけであり、啓蒙思想が国民一般の教養に浸透したすのは復古王政期のことである。一八二〇年代の「ヴォルテール主義」を直接につくり出した点でこれらの *éditeurs* の存在は重要である。Louis Girard, *op. cit.*, p. 168.
- (15) Yvonne Knibiehler François Mignet, *historien libéral, 1796—1864*, Université de Lille III, 1973, pp. 17—18.
- (16) Pierre Leroux, François Dubois の二人を中心に刊行された *le Globe* にちぎがて Rémusat, Villet, Duvergier de Hauranne, Sainte-Beuve, Bertrand などが加わり、一九世紀フランスの文芸ジャーナリズムの原型をつくった。
- (17) Cf. Jean-Jacques Goblot, Pierre Leroux et ses premiers écrits (1824—1830), Presses Universitaires de Lyon. (17) Cité par Jean Touchard, *La Gloire de Béranger*, Armand Colin, 1968, I. p. 365.
- 文芸批評の確立を叫んだその創刊の辞にもそうした青年の気負いが溢れている。
- 「王政復古以後育ち、知識欲につき動かされてきたこの世代は文芸批評にかれらの関心をひきこめるものを見出すであらうか。若ものほしはしば政治論争に性急に關わりとして非難されてきた。……」*le Globe*, le 15 sep. 1824.
- (18) この時期の世代意識の形成をより微細に検討するには、このほか当時の *salon, café, club, cercle*, など、最近の社会史が *sociabilité* の研究としてとりあげる集団のあり方をみる必要がある。

(四) 青年の運動としてのロマン主義

ロマン主義はもとより文学に限られるものではなく、美術、音楽、芸術一般から哲学、思想に至るまで、およそ人間の精神生活の全領域にわたってルネサンスの個の解放を継承した近代精神の第二の波ともいうべき巨大な精神運動

である。⁽¹⁾ここではもちろんそうした巨視的観点からロマン主義の全体像に迫ることはできない。対象をフランスのロマン主義、それもヴィクトル・ユーゴーを中心とする一群の文学者、芸術家の一九世紀前半の運動に限定して、それが有した青年の運動としての一面を時代の社会状況に照らして明らかにしようとするだけである。

しばしばドイツとフランスのロマン主義の対照が指摘されるように、⁽²⁾ロマン主義も国が違い、時期が変われば、その政治的傾向も変化する。だがロマン主義運動を全体としてみると、それがフランス革命以来の社会変動、革命による社会の解放を背景としていることはいうまでもない。この点はファン・テীগムもロマン派の作家の社会的出自の検討から確認している。⁽³⁾マンハイムは一九世紀初頭のドイツについて、「ロマン主義的保守主義」と「自由主義的合理主義」とが同じ一つの「世代現実」に対する二つの相反する反応として生じたとしている。⁽⁴⁾

同様の意味でフランスのロマン主義者たちもまた、前節で分析した一八一四年の世代に属している。シャトープリアン、ラマルティース、初期ヴィクトル・ユーゴーに代表されるフランス・ロマン主義の出発点はカトリック的、王党的であったとされるが、一八二〇年代になるとユーゴー自身を含めて、ロマン主義者たちは概ね政治的に自由主義的な立場に移行していった。それを促したのはいうまでもなく二〇年代の政治反動であり、またその中でかれらに行なった革命の伝統の発見であった。二〇年代の自由主義とロマン主義とはスタール夫人を一つの出发点とする点に共通の根をもっていた。前節に触れたル・グロブ紙は自由派の青年とロマン派の青年との間に共通の場を設定したところに最大の存在意義を見出した。⁽⁵⁾

「今日、政治的アンシャン・レジムと同じように文学的アンシャン・レジムが存在する」という一八二六年のアカデミー攻撃から、「ロマン主義とはその戦闘的側面からすれば文学における自由主義にほかならない」という有名な

定義に至るヴィクトル・ユゴーの歩みは、一八三〇年における自由主義とロマン主義の勝利が共通の歴史的文脈の中で獲ちとられたことを示唆している。本稿の観点からみれば、それは同じ世代の運動としての共通性ということになる。

しかしながら、二〇年代の自由主義とロマン主義が世代の運動として共通性を有するとしても、両者の主観的な世代意識には微妙な相違がある。青年 *jeunesse* の自意識は共通であるが、「八九年の子」という自由主義者の世代意識は一八一四年前後の歴史状況に具体的に規定されている。二〇年代にその世代はたまたま青年であったに過ぎないのであって、立憲主義や政治的自由というかれらの課題それ自体は普遍的な目標であって、かれらの世代とのみ排他的に関わるわけではない。かれらがそうした課題を担ったのはある特定の歴史状況がそうさせたに過ぎない。だからこそ一八三〇年の勝利をかちとった自由主義者の多くは七月王政体制の中に多かれ少かれ安定的な地位を得ることができたと考えられる。そこには生理的成熟と社会的上昇のリズムが合致した、その限りで幸福な世代の姿がある。

これに対して、ロマン主義の世代意識には特定の時代状況に関わるだけでなく、青春それ自体を意識し、若さ一般を価値化しようとする傾向がある。「ロマン派の軍勢にあっては、イタリア遠征軍におけると同じく誰もが若かった」というのはテオフィル・ゴーチエの老年になってからの回想であるが、その徹底的に陶酔的な調子は、『三つの世代』におけるギゾーがともかくも自己の世代の歴史的役割の客観的な評価を通して次の世代へ呼びかけようとしたのと対照的である。そこには文学者と歴史家との相違にとどまらない精神の在り方の違いが現れている。

青春や若さそれ自体を価値とする傾向はおそらくロマン主義の文学理念と内在的な関連をもっている。「規則」*régie* に対して「靈感」*inspiration* を、「手腕」*talent* に対して「天稟」*génie* を主張するロマン的精神は本来、成

熟や經驗といった価値をアプリオリに否定する。「老衰に向つては青春を以つてし、過去に対するには未来を以つてする」(9) (傍点は原文イタリック)というとき、自からもまたいつか老いるという事実を意識の外に追いやるところにロマン的精神の独自性があるのである。そうした意識はある場合には夭逝の価値化や死と自殺への願望をさえ生むことになるが、また成熟し成功したロマン主義者を特異な精神状況に追いこむことにもなる。ゲーテの回想を読む者がイロニーと異和感とを感ぜざるをえないのはそのためである。アカデミー入りを果して自から時代の最高の文学的權威となつてしまつたヴィクトル・ユーゴーにとつて政治的理由による晩年の不遇はおそらくかれ自身のロマン的精神の維持には有益であつたと考えられる。

「エルナニ」の勝利後、七月王政下のロマン主義はむしろ社会的政治的な局面で運動としての生命をもつたといえよう。七月王政のブルジョアジーの通俗性を痛罵することによつてロマン主義は新しい世代と新しい階級を一時的には惹きつけた。一八四八年はその意味で文学青年と政治青年とが手を携えて最後の昂揚を示した画期である。だがロマン主義に固有の個我の意識と、政治運動・社会運動の論理との間には根本的な矛盾がある。C・シュミットのいう「自己自身の留保」⁽¹¹⁾というロマン主義の精神はウェーバーのいう *Dienst an Sache* の対極にある精神態度であり、「政治的ロマン主義」が機会主義的になるのは保守的ロマン主義であると革命的ロマン主義であるとを問わない。一八三〇年におけるラ・ファイエットの役割が啓蒙主義の政治化の白鳥の歌であつたとすれば、一八四八年のラマルティエスとともにロマン主義の政治的役割も終焉を迎えるであらう。

一八四八年以後のフランスにももちろんさまざまな形で世代の問題を考えることができよう。けれども個々の専門領域、文化領域を超えて時代的一般状況、時代精神自体が世代意識を尖鋭化せしめる事態はおそらく第一次大戦、少

くともドレスフェス事件に至るまで起こらなかったと思われる。

- (1) ロマン主義の研究文献はそれこそ汗牛充棟の量であり、見解の差違も無限に幅がある。ここに要約した評価は近年のフランスにおける文学史的研究の共通の出発点となっていると思われるフアン・ティイゲムのものである。
- Van Tieghem, *Le romantisme dans la littérature européenne*.
- (2) たゞと致す Carl Schmitt, *Politische Romantik*, Duncker & Humblot, 1925. Einleitung. もつと致す フランスのロマン主義をもつはラントーの延長とみる点でも、ルソー自身の解釈についても、シュミットの理解は今日では疑問が多い。
- (3) Van Tieghem, *op. cit.*, p. 126.
- (4) K. Mannheim, *op. cit.*, p. 304.
- (5) 「政治新聞はもはや真実を語れなから」として「文芸紙」*Journal littéraire* として出発したル・グロープは一八二六年八月には「哲学・文芸紙」*Journal philosophique et littéraire* を名のり、一八二八年八月には言論統制法の緩和を受けて「哲学・政治・文芸紙」*Journal philosophique, politique et littéraire* と称している。この変化に応じてギン、レミューザ、デユヴェルジエ、ド・オランヌなどの自由主義者の書く政治記事の比重が増している。 Cf. Jean-Jacques Gohlot, *op. cit.*, pp. 6—8.
- (6) *Préface de Crommwell*.
- (7) 『ユルナニ』序文、邦訳、中公文庫、六ページ。
- (8) Théophile Gautier, *Histoire du romantisme*, 渡辺一夫訳「青春の回想」富山房 一五ページ。
- (9) 同、一〇ページ。
- (10) H. G. シェンク、生松・塚本訳『ロマン主義の精神』八三ページ以下。
- (11) Carl Schmitt, a. a. O. S. 100